

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【授業担当者】

所属/職名: 水産学部・准教授

氏 名: 石崎 宗周

授業科目名	海外研修・実用英語(海外研修)
研修先 (大学・国・都市名)	フィリピン・JICA事務所、SEAFDEC AQD、フィリピン大学ヴィサヤス校
研修期間	令和5年9月13日～令和5年9月24日
<p>〔研修の目的・概要〕</p> <p>目的: 海外活動を安全・効果的に行う上で必要な海外渡航上の基礎知識、グローバル人材として修得すべき海外事情、海外と比較した地域理解およびコミュニケーション能力の強化をはかる。</p> <p>概要: 渡航前に履修登録学生全員に対し、海外渡航に必要な基礎知識、途上国の一例としてのフィリピン一般および農水産分野の概要、および国際協力現場からみたフィリピンについて受講させた。また、コミュニケーション能力強化の一環としてオンラインによる研修に参加させた。農水産分野の概要はヴィサヤステイツユニバーシティ(VSU)の協力、コミュニケーション能力向上はフィリピン大学ヴィサヤス校(UPV)の協力を受け、国際協力現場についてはJICA現地事務所の協力により行った。現地への渡航希望者は、その後、実際にフィリピンを訪問し、SEAFDECの視察や博物館の視察およびUPVのミアガオキャンパスを視察した。これらや公設市場を含む農水産物流通現場の視察では、フィリピンにおける食料生産事情の理解を深め、日本との比較により地域理解を深めた。渡航先では、ミニリサーチ活動を実施し、現地理解を深め、活動の安全のノウハウを身につけるとともにコミュニケーション能力向上をはかった。今後は全学生が参加する報告会を行い、討論により非渡航学生と成果を共有するとともに深める。</p>	
<p>〔研修の成果〕 * 事前・事後学習も含む。研修の目的や学習成果の達成状況について、また地域のグローバル化や活性化に資する人材育成の観点からの成果についても記載して下さい。</p> <p>【海外渡航に必要な基礎知識の習得】: コロナ禍の影響もあり、はじめての海外経験の学生が多かったが、渡航前に行った旅程、航空便の選定理由、出国、入国手続きの説明、危機管理の考えおよび実際の経験により、自分自身で海外に渡航することを自己目標に設定している学生がいるなどから、目標を十分に達成することができた。</p> <p>【海外事情・海外と比較した地域理解】: 日々の生活からインフラの格差を多くの学生が体感していて、特に自主活動における公共交通機関であるJEEPの利用や公設市場等での視察、地域の人々とのコミュニケーションや食事を通して、日本や鹿児島の優れた点、フィリピンの優れた点を理解している。水産物の鮮度については、食文化とコストの兼ね合いでその重要性を考察し、実際の販売実態を受け止めた学生もあり、目的を達成できた。</p> <p>【コミュニケーション能力の向上】: 渡航前に履修学生全員が参加したオンライン語学研修や渡航先で行った活動内容をプレゼンテーションにまとめるにあたり行われた指導は、通常のコミュニケーション能力の向上のみならず、フォーマルなプレゼンテーションに必要な基礎を習得できている。また、自主活動で展開された地域住民との数々のコミュニケーションはコミュニケーションに何が必須であるかを学生それぞれが、それぞれの能力に応じて理解し、今後の学習・向上の抱負を述べるなど、目的を達成しただけでなく今後の向上につながると期待できる。最終発表会での現地高校生の参加は、コミュニケーションの楽しさを十分に理解することの寄与しただけでなく、今後のFB等でのやりとりでのコミュニケーション能力の向上に寄与すると考えられる。以上、それぞれの目標が十分に達成されただけでなく、それぞれの目標が有機的に研修効果を高めることができたといえる。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>関連の海外研修を開始して多くの時間が経過し、多くのことを渡航先の協力なしでも対応できるようになってきているが、特に現地学生との協働・協学は現地大学の教務日程や本学の日程の兼ね合いが悪く、充実した実施には受入機関の負担が過大となり、計画はできるものの実施段階になると困難となる。受入機関での正規活動としての設定を提案するなどの対応が必要と考えた。海外研修・実用英語(海外研修)の履修学生のうち実際に渡航したのは半分以下であった。渡航を希望しても経費の問題で参加できない学生が少なくない。渡航費補助の充実や渡航先での経費負担の軽減は今後も充実させる必要がある。引率教員の経費を教員に依存している現状も含め、骨太のプログラムとしての実施は期待できない。</p>	